

かささぎ通信 第71号

2018年 9月 14日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

二〇一八年七月の「森三郎の作品を読む会」では

『森三郎童話選集かささぎ物語』（1995年、刈谷市教育委員会）所収の「梅の木」（『赤い鳥』昭和8年1月号初出）、

「新葛の葉ものがたり」（『幼年童話集 帽子に化けたクロネコ』昭和24年2月初出）を読みました。

「梅の木」については、「かささぎ通信」第25号で、『万葉集』の巻五にある山上憶良の短歌二首から、梅の花を愛した山上憶良夫妻と古日という病弱の息子の話に仕立てていると述べました。「梅の木」では花には興味を示さず梅の実が大好きな藤原冬彰父子と、梅の花を愛でるが実のことは寝めない山上憶良一家という対比に特徴があります。

天平二（730）年正月の、太宰帥大伴旅人邸での梅花の宴の際の憶良の歌「春さればまづ咲く宿の梅の花ひとり見つつや春日くらさん」を引用して、「名高い歌よみの、山上憶良さまだ」と、鶯が梅の木に教えています。一方「藤原冬彰」の名は『国史大辞典』には見られません。しかし、「冬彰」という人物は、陸奥の蝦夷の反乱を平定した参議で、大宰府に赴任（西海道節度史）した人になっています。から、藤原宇合を想定しているのかと思われず。

「冬彰」の家の留守番を兼ねて、憶良夫婦は病弱の古日のためにこの家で暮らしたのです。妻は、古日が梅の実をほしがったことを思ひだし、「せめて黄色い実を一つ握らせればよかった」と、亡き息子をしのびます。梅の木は花も実も楽しもうとする作者・森三郎の思いが伝わるようです。

「新葛の葉ものがたり」は『赤い鳥』掲載作ではありませんが、古典に題材を得ている点では「梅の木」とよく似ています。

小松之助という若殿さまが、狩りに行った途中、水を所望して出会った娘が実は蝶々だと分るのですが、小松之助

はこの娘を奥方にし、胡蝶御前と呼んで暮らします。ところが戦が始まり小松之助は家来を連れて出陣し、その後、死んだ家来たちのために六部となつて諸国を修行して回ります。さびしく帰りを待っていた胡蝶御前は、障子に別れの歌を書き残し、春の女神の佐保姫さまに黄色い菜の花衣を肩にかけられると、小さな黄色い蝶々になってヒラヒラと飛んでいったという話です。障子に書かれた歌は「今はとて 菜の花ごろも きるおりぞ 君をあわれと おもいでぬる」というものです。これは「竹取物語」で、かぐや姫が昇天する時に「今はとて天の羽衣着るをりぞ君をあはれと思ひ出でける」と歌った歌を「菜の花ごろも」と詠み変えたものでしょう。この話は戦後、昭和24年に発行された単行本に収められています。これまでに森三郎が書いてきた童話「人形しばい」「かささぎ物語」「わらび餅」などの様々な表現を駆使して、自由に話を構成したもののよう思われます。

『幼年童話集 帽子に化けたクロネコ』（東京一陽社）には、「帽子にばけたクロネコ、あねさま人形、アオイの大臣、ザアカイとユリ、新葛の葉ものがたり、銀の馬車、唐からお年だま、カエルへのそ、春告鳥、いのちの花輪、灰いろの蝶、山のあなた、大正琴、ジャンケン橋、ヒバリ、夕顔観音」が収められています。

「かささぎ通信」第63号で、森三郎の「鐘」について、ラフカディオ・ハーンの作品を翻案した森銑三の「鐘のたましひ」との関係述べてきました。そこで「森三郎の作品を読む会」番外編Ⅱとして、「ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）」

“The Soul of the Great Bell” を読む会 を開催します。

10月6日（土曜）・10月20日（土曜）（全2回）

午前10時〜11時45分 （刈谷市中央図書館 研修室）

★初めてのの方も、是非ご参加ください。

次回「森三郎の作品を読む会」（第二金曜日に刈谷市中央図書館で開催）

平成30年10月12日（金）午後1時半〜3時半

「虹の松原」「目ぐすり」（『森三郎童話選集かささぎ物語』）